
魔法少女リリカルなのは 闇を掃う者

Force

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 闇を掃う者

【Nコード】

N4092R

【作者名】

Force

【あらすじ】

お互いが違う闇を背負った少年と少女…その二人が出会う時全ては始まる…

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

主人公設定

名前：藤崎真夜
フジサキシシヤ

年齢：10才

デバイス：EXIA
設定

3年前に死んだ父親の形見。真夜はただのブレスレットだと思っている。

魔力光はオリジナルGNドライブと同じ。

武装

実体剣「ダークリパルサー」（内蔵魔力によりライフルモード）
マギリングサーベル×2

他にも武装や機能があるようだが、リミッターがかかっており、使用不能。

外見

黒髪で黒眼。背は中くらい、痩せ型。

性格

幼いころに両親を失ったため、内向き。無愛想だが、根は優しい。
いつも空を見上げている。

一人暮らし。蓄えがかなりある。

成績は中の上。

魔力量：AA

運動神経は良い方

プロローグ（前書き）

作者は小説を初めて書きます。感想、意見、指摘等を待っています！

プロローグ

SIDE - 真夜

「はあ……」

なんで空は青いんだろうなあ……

現在俺は平凡な小学生4年生だ。まあ一人暮らしで平凡なのは知らんが……

ていうか誰に説明してんだ俺……

なんか考えてたらチャイムが鳴った

これでやっと春休みか……

とりあえず家に帰るか

家への帰り道……

さて……なにをするかな

選択肢は……

ゲームも全部クリアしたし……

ラノベ……全部読んだよな……

そう考えていた時携帯が鳴った。

『銀河を舞うDIAMOND DUST - 天使の囁き - 確かな記憶を辿って……』

ああ良い曲だなあ……って違う違う……

俺はそう思って携帯の電話に出た。

「もしもし…」

『もしもし真夜か?』

先生か…

ちなみに先生は一人暮らしの俺に構ってくれる優しい先生だ…ってだから誰に説明してんだよ俺…

「はい。何の用ですか先生」

『いや、お前忘れてると思うけどさ、冬休みの読書感想文出してないだろ?』

あ…忘れてた。

「あーはい…」

『はあ…今なら待ってやるから、春休みが終わるまでにやっとけよ』

「はい。すみません…」

『ああ。じゃあちゃんと飯食えよー』

先生がそう言うと電話が切れる。

はあ…しょうがねえなあ…図書館に行くか…

俺は行き先を変更して図書館に行く事にした。

まあ一回見たライトノベルを書くのもなあ…

数十分後…

さて着いたはいいが…何を借りるか…

「うーん…届かへんなあ…」

あん？何だつてんだよ…

俺が声をした方向を向くと…

「…ガキ？」

車椅子に乗って本に手を伸ばしている女の子がいた…いや俺もガキだけどさ…

俺は辺りを見回すが、あの子に手を貸してくれそんな人間はいない。チツ…しょうがねえなあ…俺は車椅子に乗っている女の子に近付いて、その子が掴もうとしている本を手に取って女の子に手渡す。

「ほらよ…」

「へ？」

…あれ？

「違ったのか？」

確かこれに手を伸ばしてた気がするが…

「あ、いやこれで良いんや…ありがとな。えーと…」

「あー、俺は藤崎真夜だ」

「そっか。私は、はやて…八神はやてや。よろしくな藤崎くん」

「ああ、よろしく。八神」

俺はこの時かけらも考えていなかった…この出会いがあつてびっくり
仰天な世界へ踏み出す事になるとは…

プロローグ（後書き）

作「とりあえずプロローグ完成！」

真「えーとこの作者のリア友がこいつがお気に入り登録しているいかじゅんです。是非あちらの作品を見てください」

作「いきなり他の作品の告知!？」

真「いや、だってこの短さじゃ……」

作「次回から頑張るんだー！」

真「そんなもんか…じゃあ今回はここまでだな……」

作「ちなみに次回からあとがきは結構カオスかもです！」

真「作者の性格上そうなるよなあ……」

作「それではまた次回！」

第1話（前書き）

やっと第1話書けました遅すぎてすみませんでした。

第1話

SIDE - 真夜

まあ自己紹介が終わったところで…

「じゃあな。」

なんかさっきの子が、こっちを見ているのだが…

「何だ？何かあるのか」

「いや、何も！」

「ふん。」

「なんや冷たいやないか…」

そんな事を言われ胸に、グサツと何かが、刺さった。それだけは、言われたくなかったのに、とりあえずその場を、後にした。

「さて、コンビニに行くか。」

俺は、とりあえずコンビニ弁当を買って家に、帰ろうと、したとき何か忘れてる事に気がついた。

「あ、本借りるの忘れてた。」

急いで図書館に戻ろうとしたけど…

「ま、明日また借りに行けばいいか。」

そう言いながら家に帰った…

その次の昼

そろそろ図書館が開く頃か…

昼ご飯を、食べ終わった後準備して家を、出た。

図書館に着いて何を借りようと、したときに…

「届かないなあ。」

昨日と同じ声が聞こえ、まさかと、思いながらその声の方を見た。

「うーん」

やっぱりあの子かと思いつつ周りを見てみた…どう見ても助ける人がいない。

はあ仕方ないなと思いつき…

「あ…」

手を伸ばして本を取って…

「ほらよ」

本を渡した

「これで良いのか？」

とりあえず間違つと、困るから問い掛けた

「いや、これでええよ。えーと…」

昨日自己紹介したはずだが…

「真夜だ…」

「あ、そうそう真夜くんだったね。」

「じゃあ。」

言い残し立ち去ろうとした時…

「ちよつと待って！」

ちよついきなり袖掴むか！！

「何だ！」

「いきなり去るなんてひどいなあ。」

グサツ！！昨日と、同じ感覚が…

「じゃあ、何をすれば良いだ。」

「とりあえずおしゃべりしましょう。」

「じゃあ俺は、これで…！」

「まちいな！何ですぐに去ろうとしてるの。」

「いや、そのおしゃべり苦手だから…」

「そっなん？」

「やっとおきらめたか？」

「じゃあこれで…」

「言いかけたその時…！」

「じゃあ練習しようぜ。」

「はい？何でそうなる訳…？」

「いや、用事が有るから…」

「適当に嘘ついてみただが…」

「嘘やろっ…」

「う、何で見抜かれた…！」

「イヤウソツイテナイヨ。」

「いや片言やし汗かいてるで…」

なに！！俺としたことが！汗を拭こうした時

「嘘やで。」

しまった！騙された！！

「いや…」

言いかけたその時！

「さ、練習練習」

袖を引つ張るな後変な鼻歌止める！！

数十分後

なんだかんだで来てしまった。はやての家、いや正確には八神家だな

「何してんの？早くおいで。」

仕方ないここまで来たらあきらめるか、はあ…

「今行く。」

はやてに言われるまま家中に入った。

「おじやまします。」

「どござ。」

家に、入って感じた俺の家と同じ静けさが…

「ん？どないした？」

「いや、静か過ぎるなっと思ってな？」

「そりゃ静か過ぎるからな親いないから…」

俺は、今思った何ではやては、保護者がついてなかったか。

「親は、何処に居るんだ…」

俺は、聞かない方が良いと思いつつ聞いてみた

「親は、何処にもいないで？」

「出かけているのか？」

「いや、この世にいないって言った方が良いやろ」

え！？まさかと思いつつも少し聞いてみた

「この世ってまさか死んだのか？」

「うん、そつやで…」

俺は、言葉を失ったはやてが俺と同じめになってるなんて…

「ごめん変な事聞いてしまって…ごめん。」

「謝る事ないよみんな優しくしてくるから、うちは、寂しくないで。」

「はやては、強いな…」

「はやて…」

「なんや。」

「なんて言えば良いか、わからないけど遊びに来て良いか。」

「心配してくれるのありがとうな真夜君。」

「感じがいするなよ俺は、ただ練習するために、来るんだから間違っても、はやての為じゃないからな。」

「はいはいわかったで。」

こうして春休みの終わりまで喋る練習することになった。はやて練習は、ハードだったけど、はやての笑顔見ると何だか疲れが吹っ飛ぶ感じがした。

春休みの終わりの夜

「じゃあなはやて。」

「うん、また遊ぼうな。」

「おう。」

「返事は、はいやで。」

「はいはい……」

そのままはやての家を後にした……

家に帰る途中

はやてか、結構気が強い子だったな。

「あれ？」

はやての事で、何ドキドキしてんだ俺。なんか考えてたその時！

「ん？携帯先生からだ。はい真夜です……」

『あ、真夜か読書感想文やったか？』

あ、やべ忘れてた

このあと先生にこっぴどく怒られた事はまた別の話し

第1話（後書き）

作「さてやっと第1話が書けました。本当に遅くてすみませんでした。」

真「一体ここ一週間何してたんだ…」

作「もちろんゲームだ」

真「おまえ、まさかこれほったらかしに、してたのか！」

作「いや、してないよ！悩んでたんだよ！…」

真「本当か？」

作「と、とにかくゲスト登場です！」

真「あ、話し変えるな！！」

作「ゲストは、八神はやてさんです。」

は「こんにちは。」

作「今回は、強制できに真夜を連れてく強さ凄いな。」

は「そんな事ないで。」

真「作者勝手に話しを変えるな。」

作「うるさい！！ツンデレ」

真「…」

作「あれどうした真夜さん？」

？「リミッター解除起動開始」

作「やばい！！」

真「死ぬ作者バーストソード」

作「真夜落ち着け何だその技は、やめろ！！」

真「死ぬ！」

作「ぐは！」

は「真夜次回予告やるよ。」

真「わかった」

は「ついに目印編が始まります。」

真「ついに俺のデバイスが、起動する」

は「そういえばなのは達は、どないするの。」

真「作者が何とかするでしょ」

は「ま、目印編と言っても主人公指定だからね」

真「まあなとりあえず時間がないのでまた次回」

みんな「じゃあまた次回」

作「ぐ、俺は、まだ」

真「消えろ」

作「ぐは」

は「仲が良いな」

第二話（前書き）

すみません第一話の後書きの、無印を目印と書いてすみませんでした。これからは、間違えないように頑張ります。

第二話

SIDE - 真夜

「はあ、疲れた…」

何で疲れてたのか時間は、朝まで戻すと…

「また、学校か疲れる」

「ごちゃごちゃ言いながら歩いてると…」

「おい真夜くん」

さて…今日は、どうするか…

「真夜くん？」

授業は、どうせ3時間目で終わるしな…

「真・夜・く・ん！」

久々に街に行こうかそれとも…思ってた時

「ちょいまち！」

ちょ！誰だ袖掴むのは…後ろを見てみると…

「真夜くん何で無視するかなあ」

おかしい何ではやてが、ここに居る？

「真夜くん聞いている」

ちよ！はやて笑いながら後ろに鬼出さないで…

「何だ、はやて？」

返事しとかないと、どうなるのか、わからないからな…

「やっと返事してくれたなあ」

「それで、何か用か？」

「挨拶しよと思ってなあでも真夜くん返事してくれなくてなあ」

「それは…ゴメン」

「うん、ええよ。」

なんとか、許してもらえたな

「それで、はやては、どこに行こうとしてるんだ？」

「病院に行く途中やで、それで真夜くんは…」

「もちろん学校だが…」

「そうなん邪魔してゴメンな」

「大丈夫だ」

どうせ3時間目までだからな

「じゃあ、うちそろそろ行くわ」

「わかった」

はやてとわかれた後

さて時間は……8時やべ!!

学校に着いたけど遅れてしまい先生にこっぴどく怒られたのは、他でもない

さて、何をするか…また考えた時、携帯がなり始めた見てみると、先生からだ…

「はい、真夜です。」

『おう真夜確か冬休みの読書感想文を春休みに、出せって言って出していないよな。』

そっぴえば春休みは、はやての家に遊びに行ってたか…

「で先生それがどうしたんですか？」

『どうせ、暇だから、街に繰り出すか…と考えてたところだろ。』

う、鋭いぜ先生

『どうせならその暇使って読書感想文終わらせるよ。』

うわ、めんどくさいなでも、書かないと…

「分かりました。」

『じゃあ明日まってるぞ』

「はい…」

そのまま電話を切った

そして現在にいたるわけだが…

「さて図書館に行くか…」

また、ため息をはいて図書館に、向かう。どうせ暇だからな…

図書館

「めんどくさいから適当に、借りる事にしとくか…」

「真夜くん何してんの？」

やべ、はやてに捕まったら、いつかんの終わり…いや一日終るとにかく逃げるしかない。向きを変えた時！

「真夜くんどこ行くん？」

やばい！！袖掴まれた！選択し駄目だ全部使えないとなると…

「はやく許してくれ！」

「ちょ、真夜くんではないした、いきなり土下座して!？」

情けないがこれしか方法がない…

そこから数分後…

「読書感想文？だったらうちに任せればよかったのに…」

「いや、はやくに迷惑掛かると悪いから……」

「そんな事良いから家に行くで。」

「なぜ？家に？」

「家の方がやりやすいしそれに本は、選べるし一石二鳥やで。」

「いや、それでも…」

「そんな事良いから行くで!！」

だから、はやく袖を引っ張るな。

結局はやく家に行って読書感想文を書く事になった…

数時間後

「やっと終わった…」

ここまでやったのは、何ヶ月ぶりかな

「お疲れ様、真夜くん、はいお茶やで。」

「ありがとうはやて…」

はやてが出したお茶を一気に飲んだ。

「もう、こんな時間俺帰るわ…」

「もう少し居ても良いんやで。」

「いや、家に帰って準備しなきゃいけないから。」

「だったら、家に泊まるのは？」

ぶ！！何故そうなる

「いや、何で泊まる事になるんだ！！」

「べつに、どっちでもええよ。」

「と、とりあえず家に行く。」

「何で？」

「いや、バック取ってこないと…」

「じゃあ泊まるって事でええな。」

何でそうなるんだ！！駄目だはやてだけは、勝てない諦めるしかないな

「じゃあバツク取って来るわ…」

「うん、待ってるで。」

はやての家から出て数分後

「やっと家に着いた。」

その後とりあえず学校に持って行く物をバツクに詰めてはやての家に、向かう途中…

なんか後ろに気配が…でも後ろを見ても誰もいない

「なんか気味悪いな…」

そしてまた後ろに気配を感じ振り向くけど何もなし…この時の直感
は、結構鋭いからな俺…と思ってた時！

「来る。」

一瞬感じて横に避ける。そしてその気配は、さっきまで立ってた場所
にぶつかる。

「なんだあの黒い物体？」

と言いかけた時!?

「やべ、こっち向いた!」

また、こっちに向かって攻撃してきた。何とか、かわしたけど体制を崩してしまった。

「やばい!」

急いで体制を直そうとしたけど、相手が早く攻撃して来た。

「くそ!」

その攻撃は、何とか避けたが、それで足をくじいてしまい動けない!

「く!やばい足をくじいた!早く逃げないと!!痛!!」

こうしてる間に相手は、こっちに攻撃を仕掛けようとしている...

「俺は、まだこんなところで終わるわけには、いかないんだ!!」

相手は、空からダイブしてきて逃げる事ができない!

「終わった。」

目をつぶってはやての事を、思ったその時!!

「リミッター解除起動開始。」

「え？」

真夜は、光に包まれその光で相手が吹っ飛んだ。

「主藤崎真夜、起動完了」

「な、何だこの格好…」

青い服に黒いマントさらに腕と腰に刀

「結構カッコイイ。てそれより」

黒い物体に向きを変える相手は、こっちを警戒している。

ついに戦いが始まる

第二話（後書き）

作「ついに起動した!!」

真「作者まずは、落ち着くことだ！」

作「これが落ち着いてたまるか！」

真「はやて力を貸して俺一人じゃあ止まらない」

は「別に良いんとちゃうのこれ以上うるさくしたら消すけどな」

作「はやてさんそんな事しないでください」

真「あ、作者の暴走が止まった…」

は「今日の、ゲストおるの？」

作「いやだそうか出さないか悩んでる！」

真「そんなに危険な人なのか？」

作「もうめんどくさい次回予告いくぞ!!」

真「おい、話しをずらすな」

は「仕方ないんやんどうせ…うぐ!?!」

作「はやてこれ以上は、禁則事項だ!!」

真「どうして何だ？」

作「真夜は、知らなくても良いから!!」

真「何故俺だけ!!」

作「と、とにかく次回予告さっさとするぞ。」

は「了解や。」

真「無視するな!!」

作「ついに起動したデバイス。」

は「さて真夜は、扱える事ができるか。」

真「そろそろ教えてくれても良いだろ。」

作「うるさい!!教えられない物は、教えられないんだ。」

真「はやて…」

は「いやそんな目で見ないで…」

作「やばい、と、とにかくまた次回!!」

は「耐えるやうち」

真「お願いします。」

作「てめーらもう良いだろ!！」

真「ち!」

は「うちは、耐えたぞ」

作「ハイハイ小言は、良いからまた次回」

第3話（前書き）

更新が遅れてすみませんでした。

第3話

SIDE - 真夜

「さて…逃げるか。」

でも…足がくじいていて、上手く動けないなあ…よし!。

「隙があつたら全力で、逃げるぜ!!。」

逃げる決意を、してる時

「情けないぞ、主。」

「え!?! 一体どこから声が!」

『主の腕からですけど?』

「こんな時に、幻聴が聞こえる何て…」

『そんなに落ち込む事は、ないぞ主。』

「てかお前誰だよ!」

『私は…主前!!』

「え?」

前を見ると変な黒い物体がこっちに突撃して来てる!

「やべ!?!」

『主ダークリパルサーを!』

「ダーク何!?!」

『主の右手に着いているそれ。』

「これをどろし落と!」

『説明している時間は、ありません。』

言いあっている間に近付いて来ている。

「適当に振り回す!」

『適当につて主!』

適当に振り回したら変な音が聞こえた。

「よし!当たったこれでつてあれ?」

切ったはずなのに再生しているし!!

やばい!俺の脳内選択肢

1 逃げる

2 逃走

3 run away

『この意気地無し　　っ！』

「あれ？聞こえてた」

『主何で戦わないんですか？』

「小学生があんなやつと戦えるわけが、ないだろ！」

『でも戦わないと、逃げる事出来ないと思いますけど…』

「じゃあ次攻撃して相手がひるんだら逃げるって事で。」

『主逃げる前提ですか…』

「誤解しないでくれ、逃げるんじゃないくて戦術的撤退だから気にするな。」

『分かりました。』

「よし、さっさと終わらせるぜ。」

そうして相手の方向を向いて刀を構えた。

「来い！」

黒いバケモノが突撃して来た！

「ダーク何とか」

『ダークリパルサーです主。』

そのまま突撃してきた黒いバケモノをぶった切った！

「また再生する前に逃げる！！痛！」

また足に痛みが伝わってその場に倒れ込む。

「くそ！？」

『どうした主？』

「さっき避けた時足をくじいてなあまり動けないんだ。」

『このままじゃあ黒いやつがこっちに…あれ？』

「どうした？」

『さっきの黒いやつが、いない！』

「どうゆう事だ？」

『わかりません。』

そんな事を話してた時！パトカーのサイレンの音聞こえてきた！！

「やべ！警察が来る、早くここから逃げなきゃ！！」

そのままはやての家に向かった…

「はやて起きてるか。」

「遅かったなあ真夜くんではないしたの？」

「ちょっとな、いろいろあったんだ。」

はやてと話してる時

【主この人は、誰ですか？】

俺と話してるのは、はやてだぜ…

【なるほど主の恋人ですか？】

ち 違うわはやては、友達だから！

【そつですか…】

念話している時「…

「聞ってる真夜くん！」

「な 何だはやて？」

「とりあえず家に上がったらどつちや？」

「そつだな。」

はやてが寝た後

はあ疲れた

【大丈夫ですか主？】

今日の事日記に書いたら全部つまるかもな…

【そんなにきつかったですか？】

辺り前だこんな事が毎日あったら体が持たないわ

【じゃあ鍛えた方が良いですね。】

それは、置いといて…

【そういえば私のこと、この子に教えなくて良いんですか？】

いや教えたなら多分気絶するから駄目だ！

【そんなんですか？】

多分なそういえば、お前の名前まだ聞いてなかったな、いろいろあったからな…

【私は、エクシアです主】

主は、やめてくれ真夜と呼んでくれ…

【無理です！主と呼ばしていただきます。】

わかったとりあえず俺は、眠る

【分かりました。おやすみなさい主…】

明日の朝

「どう見ても筋肉痛やねえ…」

【主情けないですよ…】

「いきなりダメダシ！」

「とりあえず今日は、家に寝てなあ」

はやては、足に手をつけた…

「痛い!?!」

大きな声を出した…

「もしかして足、くじいた…」

「いや、こけただけだ!」

「結構天然やなあ…」

【主頑張れ!】

そのまま今日は、ずっとはやてに看病されていた

第3話（後書き）

作「戦闘終了お疲れ様。」

真「今回は、情けないな俺……」

は「そんなに落ち込まなくてもええで……」

作「そうだぞ真夜、撤退は、重要だからなそんなに落ち込むな！」

真「そうだなよし、頑張るか。」

は「うん、それでこそ真夜くんだね」

作「んじゃ大体集まって来たのでゲスト紹介今回のゲストは、真夜のデバイスのエクシアです。」

エ「よろしく」

真「エクシアかぁ……」

は「どないした真夜くん？」

真「いやどうしても掴み所がないなと思ってな！」

作「はい真夜がわけわからん事を言い始まる前に次回予告始まるぞ……」

は「今回は、日常編に近いやつを出します。」

作「出来るだけ更新を早くしてみせます！」

真「感想とかも待ってるのでお願いします。」

工「とりあえず終わりますか！」

は「なんか早くない、終わるの？」

真「大体は、カオス時空になるのになあ……」

作「今回は、そんなに時間がないのさ!!！」

真「んじゃまた次回！」

工「主俺あんまり喋ってない」

真「次回が、あるから心配するな！」

第4話（前書き）

結構更新を遅れさせてすみません。

第4話

SIDE - 真夜

「さて…今日はどうするか？」

今日は、土曜日だしどうせなら…

「よし！街に…」

『駄目です。主、今日は、特訓をやるんです！！』

「何故特訓なんだ？」

『前に戦った時 闘いかたがめちやくちやだったので…』

そんな理由で！！

『今そんな理由でって思いましたね。あれが人だったら、やられてましたよ！』

嘘！俺の心を読まれてる！！

「人と戦う事あるの！」

『わかりません。ただこの力を手に入れたならありえますけど…』

それまでに鍛えるって事か…だったら！

「丁寧にお断りします。」

『主、前みたいになりますか…』

前って確か…：は！？筋肉痛になったあの時か！

「でも道具が無いんじゃない…」

『そこにあります。』

そこに置いて有るのは…木刀が二本にダーク何とかみたいな物が…

「これをどうやって作ったんだ！！」

『それは、機密事項なので教えられません。』

エクシアあなどれない奴だな…

『私は、ことごとく先手を打ちますから。』

「お前…それは俺を追い込むって事か！」

『まあ…そう思つのが良いでしょう。』

と、とりあえず逃げる方法はなにかないか！

『主無理ですよ。逃げる事は出来ません。』

その後はエクシアに特訓させられて夕方までずっと絞られてた。

こんなに疲れたのつい最近に感じた気がする。

ベットの上で横になりながら考えてた…

もしエクシアのゆう通りに人と戦う事になったらどうするか…相手が譲れない覚悟を持って襲って来たら俺は…

『主？』

それでも…俺は、出来るだけ戦うそれだけだ！

『主…！』

「どうしたエクシア？」

『主とりあえずご飯は、どうするんですか！』

「コンビニ弁当だろ？それがどうした。」

『そればかりだと体に悪いですよ…』

「じゃあどうすれば良いんだ…」

『どうせならはやてさんに教えて貰えば良いと思いますけど…』

「いや多分迷惑掛かると思っんですけど…」

『明日聞いてみますか。どうせ明日暇ですから…』

「そうするか…今日は、コンビニ弁当で良いだろ？」

『勝手にしてください。』

話しが終わりコンビニに行き適当に買って家に帰った。

明日の朝

「結局行くのか？」

『はいもちろんです。主は健康な物を食べないと大きくなりませんから。』

「わかったから行くぞ」

そのままはやての家に行く事になった

「はやているのか？」

「どないした真夜くん何か用か？」

「いやちよつと料理を教えてもらいたいんだけど…駄目か？」

「べつにええよ。」

返答はやー！

「そ、そうなのか…」

俺は、苦笑いしながらはやての家に入った

「うちも今料理作ろうとしたところやで。一緒に食べましょ。」

「まあ良いけど…」

【主、ちゃんと覚えて下さいね。】

わかったから静かにしろ。

【頑張ってください】

エクシアとの念話を切った。さてと…

「はやて最初は、何をすれば良いんだ？」

「最初はそのにある食材を使って…」

はやての家で猛特訓が始まった。だけどいろんな事があつた。食材を切ってる途中で指を切つたらはやてが慌てたり…料理を黒焦げにしたり…エクシアに追い打ちを打たれて落ち込んだり…間違えて変な物を入れ間違がつたり…いろんな事があつたが何とか出来た。

「はやてどうだ…」

「うん美味しいで。」

よし…！

【よかったですね主。】

あれ！？急に眠気が…

【そういえばもう夜ですねそろそろ家に帰りますか？】

そうだな。帰るとしますか…

「はやく俺そろそろ帰るわ。」

「何でもう少し居ても良いんやで…」

「いや、もう夜だからさ…」

「別に家に泊まっても良いんやで…」

「それがその明日一応学校だから泊まる事が出来ないからすまん…」

「何でそこで謝るの別に謝らなくて良いで…」

いや本当は、はやくの家に泊まりたいけどやっぱり学校があるから難しいな。

「だけど学校が終わったらいつでも遊べるから大丈夫だ。」

「そやな……じゃあ一応アドレス交換するか？」

そういえば交換を忘れてたな……でも何で今？ってそんな事別に気にしないで良いか。

とりあえずアドレスを交換した後…家に帰ってさっそく食材を使った料理を作ってみた…

「これ…食べれるのか？」

『それは私に聞かないで下さい。』

俺の目の前には…またまたちょこつと焦げた料理があった…食べられるかどうか分からなくてどうするか考えてた…

「今日はやっぱりコンビニ弁当で…」

『主駄目です。ちゃんと作った料理は食べるんです…』

「で、でもあんな物食べると早く死にそう…」

『大丈夫です。主は殺しても死なないタイプですから。』

「それって褒めてるの？」

『いえ…からかってるだけですから。』

「なんか…エクシアの言い方以上にむかつくな…」

俺は、呟きながら拳を握り締めて怒りを抑えてまた喋り始めた…

「とりあえず食べてみるか…」

俺は渋々自分の作った料理を口に運んだ…

「ッ!？」

食べた時の反応が声にならない程に驚き…自分でもびっくりしている…

『どうした主?』

「エクシア!俺が作った料理が結構美味しくてな…自分で自分の料理に泣いてる状態だ。」

「けど…まだはやての方がこれより半分は、美味しい…出来るだけはやてに近づいてみるか…」

「そつと決まればさつそく…次作ってみるか…」

『主…食べられる量までですよ。』

エクシアの声を聞いた時に何かを忘れてる事に気付く…何かと考えている時…時計を見た…

「やべ!!もう深夜3時!早く寝ないと学校に遅れる。」

『全く…主は情けないですね。』

「とりあえずおやすみエクシア…」

『おやすみなさい主…』

俺は、目をつぶったその後、夢を見た…森の中に俺と同じ背をした男の子がいた…怪我をしていた…そして前にあの時戦った黒い化け

物がいて…男の子が魔法みたいな力を使おうとしてるみたいだ…だけど黒い化け物が男の子に向かってる…そして男の子が呪文みたいのを唱えて黒い化け物が吹っ飛んで逃げた…その後はよく聞こえなかったが男の子が動物になっていた後エクシアの声で目覚めた…

『主！起きて下さい！』

「いやもう少し寝かせて…」

『良いんですか？学校に遅れても…』

「学校……………は！？今何時！！」

『さあ？確か8時ですね…』

「やべー！！完璧遅刻じゃんエクシア急いでいけ！！」

『……………』

「エクシアどうした？」

『いや…別に何でもありません…』

「そうか？いつもだったらここらへんでいやみを聞くのに…」

『聞きたいんならたっぷり言いますけど。』

「いや時間がないから良いです！お断りします！…」

『そうですか…時間があつたらねちねち言っても良いと…』

「時間があっても全力でお断りします!!」

『とにかく…早く学校に行きましょう。』

「エクシアのせいで遅れてるんだろ!!」

『いやですね私が起こさなかったら完全に遅刻してたのに…』

「と、とにかく急げば間に合う…多分…」

『おやおや、逃げましたね。』

「うるさいとにかく急げ!」

俺は全力で走って行った…エクシアは何か話があるようだったが今はそんな事より学校に着く事が先決だ!!

学校帰り

「こんなに疲れたの人生で始めてだな…」

『主、出来るだけ念話を使って下さい。』

分かってるってだけで本当に今日は疲れた…

何で疲れたとゆつと…まず朝から全力全開で走って何とか学校に着いたけど完全に遅刻して先生に怒られたし…昼ご飯になった時…よく考えてたら家に財布を忘れてた!!先生が弁当を分けてくれたの

で何とか出来たが…授業中に寝てしまつて先生に、おもいつきり怒られたのは、他でもない…

「はぁ……………なんか今日は、不幸の日なのか…」

【主、すみません話しがあります…】

どうしたエクシア急にあらたまつて？

【実は…主、朝に変な声を聞きましたか？】

いや…朝は、忙しかったから聞いてないけど？

【いえ、主が起きる前です。】

特には、聞いてないけど……………だけど夢を見てたな？

【夢とは、どんな物ですか？】

いたつて…普通なのか男の子が黒い化け物と戦っていた夢だが？

【え！？】

どうしたエクシア？急に言葉を出さなくなつただけど…

【主、その事ですが…主が起きる前に実は、念話が聞こえてるんです。】

それは、どうゆう事だ？

【簡単に言えば誰かが助けを求めているのです…】

誰かって誰が………

念話している時もう一つの念話が聞こえた……

【助けて】

エクシア、もしかして!!

【主、そのもしかしてです!】

エクシア念話が聞こえたところ分かるか!

【一瞬だったのでわかりません。】

そうか………

【助けて!】

エクシア!!

【大体分かりました!!森の奥です!】

了解!えーと森は、あれか!

とりあえず俺は、森の奥まで向かって行った…

「エクシアここらへんか?」

『分かりません。せめて5秒間まで続いてればわかりますけど…』

「じゃあここらへんを捜すか……………ん？誰かいるエクシアここから
念話だけだ。」

【わかりました…】

「どうしたのなのは？急に走りだして…」

「見て…動物怪我してるみたい！」

「う、うん…ど、どうしよう…」

「どうしようってとりあえず病院！」

「獣医さんだよ！」

「えーと…この近くに獣医さんってあったっけ？」

「あ、えっとこの辺りだと確か？」

「待って家に電話してみる！」

……………エクシアどうする？

【私に聞かないで下さい！！】

とりあえずあの子達に任せるか…

【良いんですか任せて？】

多分な……後あつちに行ったら話しを聞かせてと言いつつでな……

【はぁ？】

まあ悩むなって動物は、任せて家に帰るか……

【了解です。主……】

そして俺達は、家に帰る途中……

さて……この後何をするか

【さっきの動物は、大丈夫でしょうか……】

エクシアそんなに気にしなくて良いんだよ。

【ですが……】

俺達が暗い雰囲気になってる時……

「あ！はやてからメールだ……」

【なんて書いているんですか？】

いやいたってシンプルに今、暇かあと書いてある……

【返事は、もちろん……】

答えは、究極に暇だ……

……あ！返事が帰って来た。

【なら家に来て待ってる……だって主…】

しかたない行くか…どうせ家に帰っても特訓だろしどうせならはやての家にまた料理を教えてもらいに行くか！

【主…なんか楽しんでますね。】

と、とにかく行くぞ！

はやての家

「はやて今、来たけど…」

「あ！真夜くん上がって上がって…」

【……………】

どうしたエクシア

【いえ……………あの動物の事ですが…】

あれか……………だから大丈夫だろ

【ですが……………】

とにかくこんな暗い話しは、やめだ。

【ありがとうございます主…】

ん？なんか言ったか？

【内緒です……さて…はやてさんの料理の手伝いをしたらどうですか？】

なんでそんな事……あれ黒い煙りが……おいおい何か焦がしたのか？

「真夜くん！！電子レンジから料理を取って！」

「ちょい何で料理を焦がしてるの！」

「後で説明するから早く料理を取って！！」

【はやてさん……慌て過ぎて何をすれば良いか判断が出来てないです…】

お前！そんな分析しなくても良いだろ！！

【主、とりあえずあっちに行かないと…】

「はやて今行くから待ってる…」

その後はやての作った料理が黒く焦がしてしまつて…それをしかたなく食べてみたら結構美味しかったけど少し焦げ臭かった…

その夜

「はぁ……もう疲れた……なぜこんなに疲れたんだ……朝は、全力疾走昼は、金が無くて先生のを分けてくれた……さらに夕方は、念話の聞こえる方に走って行って結局出るのが面倒なのでほっといて最後は、はやての黒焦げ事件……はぁ疲れる……」

【主、なに独り言を言ってるんですか！】

良いじゃん。はやてが寝てるんだから……後、俺眠るから……

【分かりました。】

そのまま眠りに落ちた。

【主、起きて下さい。】

「真夜くん早く起きて……！」

「いや……もう少し寝かして………」

【主、起きて下さい……！学校に遅れますよ……！】

「真夜くん学校に遅れるで……！」

うるさ過ぎて眠れない……

【「真夜……！」】

「だぁ……もう分かったからそんなに呼ぶな！」

【やっと起きましたか！学校に遅れますよ！！】

「今、何時だか分かるか？」

「一応8時かな……………」

「また完全に遅刻かよ！とりあえず早くしたくしないと……………」

【主、後で話しがあります。】

「んじゃ行って来る！！！」

「いってらっしゃい。」

後でエクシアの話しを聞いて驚いた！！俺が寝た後にまた念話があったらしいその後は、どうなったのか分からない……………何で俺を起さなかったと聞いてみたら……………内緒と言って聞いてくれない。

第4話（後書き）

作「さて……やっと更新したぞ!!」

真「ちょい待て俺の性格変わってないか!!」

は「いいやん別に……」

エ「はやてさんも変わってますよ。」

作「それは、気にするな気にしたら負けだぞ。」

真「作者がそれを言ってもなんも説得力ゼロ何だけど……」

は「そやな……」

エ「主に賛成します。」

作「そこまで追い込むな!!」

エ「私は、ことごとく先手を打ちます。」

作「おい!!どっかでメガランチャーを撃つ準備してるのか!!」

エ「いえいえ私は、そんな物は、撃つ事は、ないです…………だけど
いじめるのも良いですね。」

真「………止めた方が良いのか?」

は「分からん……」

真「もう少し見てるか……」

は「そやな……」

数分後

作「はあ、はあ、そろそろやめるか……」

工「このままやっても私の勝ちになるからと……」

作「いやそうじゃなくて次回予告しないと……」

工「まあ良いですいつか結局つきましょか……」

真「やっと終わったな……」

は「疲れたなあ……」

作「そこ……！何お菓子とお茶をやっている……」

は「良いやん別……」

真「そうそう長いから何もやる事がないもん……」

作「お前らにツッコミすると時間が掛かる。」

工「とりあえず次回予告しますか……」

作「今回は、話数てきには……………無印だと3話だな。」

真「今度は、早く書けるのか？」

作「それは、考えてみる……」

は「大丈夫かなあ……」

エ「作者頑張ってくださいね……」

作「よし！頑張ってくださいか……！」

真「それじゃまた次回……！」

は「今回は、上手くまとまったなあ。」

第5話（前書き）

今回は、無印とギャグを入れてみました

第5話

SIDE - 真夜

「はあ……………雲って良いよなあ。」

【主……………なぜいきなり変な事言ってるんですか？】

だってさ……………雲ってそこらへんで漂ってるし……………何ものにも捕われないから良いじゃん。

【それは、分かりますけど……………どうしてそんな事を思ったのですか？】

ほら最近いろんな事があったろ……………それでちょっとな……………

【なるほど……………つまり疲れる事は、やりたくないと？】

いや違うけど何でそんな方に持つてくの…！

【全く……………主の考えぐらい分かりますから。】

おいエクシア話しが噛み合ってないぞ……………

【そうでしたか……………全く歳をとりたくないですね……………】

……………はつきりゆうとお前……………全然歳をとってないだろ……………

【あれ、ばれましたか……………確かに歳は、そんなにとってないですよ。】

はあ……エクシアと話してるとなんだかムカつくな……だけどころ……話し相手がいると楽しいな。

【主！前、前！！】

え？

気付いた時には、もう遅かった……ボールがこっちに向かって飛んで来ている。そのまま真夜の頭にぶつかって転がる……

【大丈夫ですか……主？】

どっから見たら大丈夫に見えるか……痛いに決まってるだろ！！

その頭にでかいたんこぶが出来ていた……確かに痛そうですね。

「すみませんボールを取って下さい。」

おもしろい……どうせなら一発決めるか……ストレス発散のために……

【主……何をするきですか……まさかだと思えますけど……】

そのまさかだよ……よいしょと……

真夜は、ボールを持ってゴールの方を向いて構える……

「いくぞ……おら……！」

真夜が蹴ったボールがゴールに向かって一直線に飛んで行って……ゴールキーパーが守ったが……そのままゴールしてしまった……

よっしゃ……ナイスシュートしたぜ……あれ？どうしたエクシア

…黙り込んで？

【いえ……ゴールから結構遠いはずだったのに…軽々と入れる主に正直驚いています…】

そうか？こんなの普通だぞ……でも久しぶりだから狙いがちよつとはづれたかな…

【ちよつと失礼ですが体育は、どのくらいの成績ですか？】

体育か……確か半分は、上だな……それがどうした？

【いえ…何も無いです。そんな事よりも…早くここを立ち去った方が良いですよ。】

そういえば……なんか視線が痛いこのパターンは……逃げるか！

【そうですね……じゃああつちに……猛ダッシュュー！】

そのままダッシュした俺……そして……そのせいで新しいあだ名が付けたのは……誰も知らなかった…

走ってから数分後

「はあ、はあ、たく…きついぜ……はあ、こつ走ると……」

【主があんな事をするからです全くとりあえず、あそこに座りますか。】

ちょうど良いところに椅子があるな……よいしょと……さて……「じ」はどこだ？

【主！！まさか知らないで走ってたんですか！】

いや途中まで分かってたんだけど……

【なるほど……ここまで来た時には、分からなくなってた……でも主なら道ぐらい分かるでしょ？】

いやこんな道……通って無いから分からないんだよ！！

【いやそこで逆ギレしなくても……あっちにお店が在るから行きましょ……】

今話しをずらしたな……全く仕方ないか……一応その店に行くか。

そんなこんなでお店に向かう事になった……

結構ボロボロなお店だな大丈夫なのか……それよりも人が住んでるのか？

【分かりませんが方法は、これしか無いですから仕方ないです。】

はあ……もうツツコム事がめんどくさくなった……んじゃ入るか……

俺は、仕方なく店に入った……店の中は、古い物ばかりで何一つ新しい物が無い状態だ……

「誰かいませんか？すみませ〜ん」

【誰もいませんね…間違えて空き家に来てしまったかも知れませんか…】

「空き家つてお前…！」

「いらっしやい…」

後ろから声が聞こえて振り返ると…おばあさんが一人りいた…

「あ、すみません迷子になったんですけど…ここってどこですか？」

「まあ、まあ、教える前に一つ買っていったらどうですか？」

「一つって言われても何か…あつた！」

【何がですか…これって仮面？】

「カ、カツコイイこれって何円ですか！」

「2000円ですけど」

【ぼったくりじゃん…！主買わない方が…あれその手に持つてるやつは？】

その手には、ちょうど値段と同じ金があった…一体どこにあったんだ主…それより目を輝きながら見なくてもいいでしょ

「買います…！」

「ありがとうございます。久々ですねこんな事ゆづの……」

「すみませんあの帰り道を教えて下さい」

「帰り道かそこを左に曲がれば学校が在るからその人に聞きなさい」

「ありがとうございます。」

そのまま店を出て学校に向かう途中に……

【良いんですか……こんなところで無駄遣いして?】

良いじゃんこの仮面結構カッコイイじゃん

【はぁ………主ってセンス無いですね………ん!?これは、主つかれてる暇は、ありません!!】

何でそんなに慌ててるんだ?まさか何かあったのか!!

【はい!ヤバイ心配がしています。こっから商店街辺りです!!】

「了解!変身して飛んで向かう!セットアップ!!」

【ちょっと待って下さいけっかいはって無いから……このまま行くのは、危険です!!】

「忘れてた………だったらエクシア!バリアジャケットをちょこっと変える事は、出来るか!!」

【はいまあ一応出来ますけど問題は、顔です！】

「バリアジャケットを変える事だけでじょうとうだ!!」

さっき買った仮面を使って変身した…

「いくぞエクシア!!」

【了解です主!!】

そのまま気配がした方向に向かって飛んでいたら木がきよだいかしていた!!

「これってやばくないかあんなのと戦えとどう見ても勝てないって!!」

【そうですね確かにどう見ても勝てそうに無いですね……主?下に居るのは、まさか!!】

「あれは、はやて!!どうしてこんなところに居るんだ?ってそんな事は、どうでもいい!!はやて今助けるからな待つてるよ!!」

そのまま急降下してはやてに近付く!!

「何これ来ないで!!」

木の根っこがはやてに襲い掛かる直前で上から飛んで来た

「な、なんや次は!!」

「魔法と刀を使う正義の使者！！龍星ただいま参上！！」

「……………あの真……………」

「俺の名前は、龍星だ！決して真夜でわない！！」

【主、おもいつきり正体をばらしてどうするんですか！！】

「うるさい！！とにかくさっさとやるぞ！！」

【来ます！！】

「君は、良いつてゆうまで隠れてて……………」

「……………分かった」

「よし、掛かって来い」

そのまま木の根っこに向かって言い放ったと言っても…………木に言っ
て意味があるのかは、知らないがな…………そのまま木の根っここと戦う事
になったがさすがに多すぎるし…………さらにしつこいこれは、長引いたら
負ける！！でもここで逃げたらはやてが逃げれない…………どうすれば良い

【主、木が消えています！！】

え！？何で消えてるの！！

【分かりませんが誰かがやったとしかないでしょ？】

「だな…じゃあ帰るか…その前にもう出てきて良いぜ…」

「どうゆう事真…じゃなくて龍星さん？」

「それは、後で話します。それでは…」

「ちょっと待ってってもういない…」

危ないばれるところだった…

【いやもうばれてますけど…主聞いていますか？】

今日は、疲れたから次に会う時で良いだろ説明するの

【そうですねとりあえず家に帰りますか…】

そしてある夕方

「はやく居るのか？」

「なあに真夜君…」

ちょっと待って何でそんなに怒ってるの

「とりあえず説明するから中に入れて」

「うん分かった中に入って…」

はやてあまりに怒り過ぎてしゃべり方が間違ってるよ…

【主、頑張ってください】

はやての家に入って説明開始

「なるほどなあ魔法ってそんな事が出来るのね」

『そうですね主のは、ある意味で魔法は、あんまり使ってません』

「それでな…やべそろそろ帰らないとはやてすまない」

「あ、真夜くん！！」

「次に来る時また教えるから」

家から出て数分後

「はやてには、半分は、話したよな」

【はいそうです。】

「後は、また今度だな」

ただこの選択は、結局真夜を追い詰める事になったのは、自分でも分からなかった。

第5話（後書き）

作「いろんな意味で疲れたぜ…」

真「大丈夫ですか？」

作「一応大丈夫だそれより今回のやつは、どうだった？」

エ「点数を付けると2点だな…」

作「はにあ！！！」

エ「痛い！何をしやがる！！！」

真「エクシア言っちゃ駄目なのと言って良い事が在るから忘れるなよ…」

エ「はい、分かりました」

は「それで今回は、何をするの？」

作「特には、何もなし…」

真「はあ全くじゃあ次回予告をやりますか…」

作「簡単にゆうと無印の6話だな」

は「うちの出番は、あるかな…」

エ「大丈夫です主が何とかしてくれます」

真「なぜ俺に押し付ける！！」

作「さあまたカオスになる前に終わらせますか」

真「ちょっとまで無視するな！」

は「また次回！！」

第6話（前書き）

やっとケータイ直ったので投稿します

と、とにかく俺は、考えてるんだ…静かにしてくれ…

全く主は、変なところで意地張って…仕方ないですね…私は、はやてさんに念話をしてみた。

【はやてさんそろそろ主を許してくれませんか…】

そうしたいんやけど真夜くんが謝らないと許す気がしないからなあ…

【まあ…確かに主が悪いですけどね…】

そつやるだから許せないんやで…

私は、少し考えて念話を返す

【分かりました。出来るだけ説得してみます。】

よろしくなエクシア

さて……なんか良いアイデア無いかな…ん？これは！？

【主！どこかで何か発生しました！！】

お前どこかって何処だよ！！

エクシアの感知能力は、気配みたいので感じてるので一瞬の事でも大体は、分かるらしい。

【とりあえずある程度分かりますから、早く急いで下さい。】

分かった！！

真夜は、急いでエ

クシアを持って家から出ようとしていた…

【はやてさんすみませんちよつと出掛けて来ます。】

……仕方ないなあ…頑張つてな。

はやてと念話していると玄関辺りでこけた音がするがとりあえず無視した

【主くれぐれも無茶は、止めてくださいね…】

転んでる真夜に向かって念話を送った…

分かってるって!!

私達は、何かが、発生した場所向かって走った…はあ…これが終わった後主は、どうする気ですかね…まあ頑張つて説得してみますか。

S I D E - 真夜

はあ……はやてに嫌われたかなでもどう謝れば良いか分からないからな…とりあえず悩んでる暇はなさそうだからさっさと片付けるか…

はやての事は、後にしてエクシアが言った場所へ急いだ。だけどそこでは空を飛んでる女の子二人が居た

えつと……エクシアあれは…

ちよつと戸惑いながらエクシアに念話してみる

【主、分かりませんか。】

分かるけど…ま、まさか魔法少女なのか…

【まあ…そんな感じですね…】

どう見ても魔法少女って呼べるのか！あんなに激しいぶつかり合い
！！

【そうですねあれが普通ですよ。】

そ、そうか…あれが普通か…………すまんどつ見ても普通に見えな
いんだけど…しかもこれが普通だったら喧嘩のレベル越えてるよ！！

【アハハそうですね…てか主少し落ち着いたらどうですか？】

エクシアは、とりあえず真夜に落ち

着くように念話をしている。

分かってる！！はあ…めんどくさいけど止めるしかないな…

【良いんですかそんな事して…】

それ以外にやる事ないからな…

【まあ気をつけて下さいね…】

俺は、二本の刀を構えて突撃した…だけどここの後止めた事を後悔す
る事になる…

「はあっ！！！」

「たあっ！！！」

激突しようとした二人の前に真夜が刀で止める…

「事情が分からないけど戦いを止めるんだ!!」

この時真夜は、話し合いで分かり合おうと思ったけど現実には、そんなに甘くなかった…

「くっ！まさか管理局の人間!!」

「え？」

この時思いつきり誤解されていた…管理局の人間って勘違いされていた

「俺は、ちが…」

「フエイトー旦那引くよ!!」

「分かった。」

そして金髪の女の子と動物みたいな人は、転位して逃げた…

あれ？二人だけじゃあなかったのか？

「あの…」
ツインテールしている女の子が真夜に話しかけてるが…

まあとりあえず終わったから帰るかエクシア…

【分かりました。】

「えっと……」

何か聞こえるが無視無視…

【主……無視しても良いんですか？】
に質問してみた…

エクシアは、真夜

エクシアあれば、絶対はやて思考だから捕まったら最後生き残れない！！

【主、それはオーバー過ぎるのでは…】
ながら念話している。

エクシアは、呆れ

だから無視して逃げるそれが今1番の方法だ…

【だったら主、後ろを気をつけて下さい…】

「え？」

まさかと思い後ろを振り返ってみたら

「待ってて言ってるでしょう！！」

後ろから巨大な魔力が放たれる瞬間！！この時の真夜の考えた事は…

1 煙りに紛れて逃げる

2 とにかく逃げる

3 逃走

よし1しかない！！

【主！どれも当たりますけど…】

思考を読むな！！それよりも大丈夫であれば、当たっても………工
クシア無理当たつたら死ぬかも！！

【大丈夫ですよ主は、頑丈ですから…】

とりあえず真夜を励ますエクシア…

無理だからあんな…

「えいつー！！」

【とにかくダッシュです主！！当たったら死ぬと思って下さい！！】

結局かよー！！この時にゆう言葉は、とあるアニメで……

「ふ、不幸だあつー！！」

【何で！？上条さん！！】

とにかく走つて逃げる真夜だがやっぱり砲撃は、早過ぎて逃げ切れ
ないと思ひながら死ぬ気で走つた…そして砲撃が止んだ後…

「あれ？あの人は、どこに行ったの！！」 女の子は、辺りを
見渡すが…

「なのは……もう逃げたみたいけど？」

「なにそれ！！」

こんな感じで真夜は、難を逃れた…

はやての家の前

「はぁ……疲れた」

そこには、背後から砲撃を撃たれて怪我をしている真夜がいた…

【主、危機一髪ですね…背後から撃たれて少しの怪我で帰って来たなんて】

全くだ！あんな砲撃を受けて生きてる自分が凄いのか？

【いや、こつちに聞かないで下さい】

いろいろ念話していると…1匹の動物が近くに寄って来た…

【あの…そこに居るのは？】

念話してるのに聞かないで念話してる…

おい、エクシア大胆何で他に人が居る事を教えなかった…

【いえ、私にも分かりませんから…】

もしかしたら俺がフルボッコされていたかも知れないんだぞ…！

【私は気配みたいので感じて知らせてますから詳しくは、知りませんで】

それってエクシアの勘が鈍ってるからだろ…！

【おーい聞ってる?】

一生懸命自分は、ここに居る事を知らせてるが…

【勘じゃなくて気配ですけど主!それは、言わないで下さい!はつきりと言いますが主は、もう少しまわりを見て下さい!】

ちゃんとまわりは、見てるけどエクシアが教えないと分からないからな!!

【私に頼らないで下さい!少しは、自分で頑張ってください!】

何だと!!

何ですか!!

【おーい!】

念話をした途端!!

「うるさい!さっきからなんだ!」

二人の怒りがおもいきり一匹にぶつけられるがそれでもひるまないで念話を続けた…

【確か君って…ビルの所でなのは達の戦いを止めた人だよね?】

「ああ…そうだけど何か問題でもあるのか…」

『主、もう少し言い方に注意してください。』

「はあ、分かったよ。」

とりあえず念話を割り込みした一匹は、結構話しが分かる奴でなゆつくり話しをしていたが、さっきの大声を出したせいで結構面倒な事になるとは誰も知らなかった…

約10分後

「まあ…大胆の話しは、分かったが、何で俺にそんな話しをするんだ？」

【それは…なんか悪者みたいな感じが無いからかな？】

『まさかそれだけですか？』

【それと…僕には責任があるんだジュエルシードがこの世界にあるのは僕のせいだから大変な事が起こる前に止めるんです…】

『話しを変えないで下さい…』

「いやその前にえつと…高町な、な…ええい！！めんどくさい砲撃女にやらせてるじゃん」

「いやさっき言った通りなのはにやらせたのは上手いから…それだけです。」

『主、砲撃女って何ですか』

必死にツッコミをするエクシアをほっというて話しを進める真夜達

「って事は、実際ユーノは弱いつて事かよ」

「僕は、これでも君よりも強いから………多分」

「じゃあ……いつか戦うか一対一で勝負して、絶対俺が勝つ」

「良いよ。僕の方が強いから負けないよ」

『私を抜かして話しを進まないで下さい』

エクシアは、必死でツッコミを入れたけど……結局無視された

「そうゆえば何で、俺達の後を付けて来たんだ？」

「それは………君達が管理局だと思ったからかな……」

『そういえば管理局って何なんですか？』

「えっと管理局は……次元犯罪を取り締まる警察辺りかな……」

「それに間違えられたって事か……でも何で背後から打たれるはめになっただんだ」

「えっと………話しをしようとして話しかけたが無視したからだね。」

『大体の話しは、分かりました。それでそろそろ帰らないと怒られるんじゃないんですか』

「あ、しまった!!」

二人が気付いた時もう11時を過ぎていた

「やばい早く帰らないとなのは／＼はやてに怒られる」

『お、見事にハモってますね。』

「それじゃあ僕は、帰るよ…えっと…」

「真夜だ、後デバイスのエクシアだ」

「じゃあまたな真夜さんエクシアさん」

そういつて、走って家に戻る……あれいつの間にか普通に話してたよ

『それじゃあ我々も帰りますか…「俺のい…」はやての家に』

「やっぱりそうなるのかよ」

『ささ、早く行きましょ主』

「わかった行けば良いんだろう行けば!!」

そして扉を開けたら目の前にははやてがいた、そのまま数秒経った後静かに扉を閉めた

「って何でしめるんや!!」

思いつきりツツコムはやてに言われ渋々中入った

「で、真夜くん何かゆう事は、ある」

「えっと……ごめんはやて」

そのまま土下座をしようとしたがはやてが止める

「良いよ真夜くんうちも悪かったと思うから」

「はやて……あり」それと今日は、一緒に寝てな「……ええー!!」

いきなりの提案に驚く俺だけどたまに一緒に寝て居るとしてもさすがに恥ずかしいから床で寝てるからそれでも良いよな……

「今回は、ベットやで」

「……なんでだー!!」

そのまま深夜1時ごろ

なあエクシア今日は、いろいろあったな…はやてとは喧嘩するし何だか管理局に間違えられるしさ後ろからは、撃たれるわさんざんだ

【でもそのおかげでユーノさんに会えましたからオツケーて事で主】

だな……あれユーノって誰

【さっきいたフェレットとです】

あれリスじゃあないのか…

【違いますあれはフェレットですフェレット！】

わかったんで名前はいつの間にも聞いたんだ

【主が逃げてる時少し話しが聞こえたので】

その時かよ！！まー良いけどよなんかはやてが腕を掴むんだけど

【おおー面白い格好ですねじゃあ私は、先に休みます】

おう それにしても激しく掴むよな

「……………かな……………」

ん？何か聞こえたような

「行かないでうちを一人にしないで……………」

そういつてはやての目から涙がこぼれる

そうかはやては、はやてで一人が寂しかっただからやたら俺にメー
ルするんだな……………ま、次からは、出来るだけ側にいるか

そういつて俺は、はやての涙を拭き取った…はやては、少し微笑ん
だその顔見て俺も眠った……………

第6話（後書き）

エ「まさか私が休んでいる間に主が凄い事をしているなんて」

作「男だねえ」

は「……………」

真「やめて見ないで恥ずかしい」

エ「これで主は、一步大人に近づきましたね」

作「そのうち襲いそうだな」

は「真夜くんまさか」

真「もうやめろおお！！！！」

作・エ「「セーの回避リアクション」」

真「ハア、ハアとりあえず今回のゲストの登場です」

エ「なのはLoveと叫ぶ野獣ユーノ・ザ・野獣の登場ですね」

ユーノ「それほとんど嘘じゃないか！！」

は「まさかユーノくんがそんな人だったなんて」

ユ「誤解だアアアア！！！！」

エ「さて冗談は、さておき……」

真「おいさっきの説明で結構落ち込んでるぞ」

エ「良いんですよ別にどうせそのうち復活するでしょ」

作「投げやりだなおい」

エ「はい はいとりあえず次回予告行きますよユーノさんも一緒にやりますよ」

真「ついに最終決戦？」

は「そして病院に行き、うちの事を知る真夜」

ユ「……………次回で無印終了」

作「出来れば感想をお願いします。」

エ「それでは」

ユ「次回をお楽しみに」

第7話（前書き）

無印編終わりです

第7話

SIDE - 真夜

俺は、学校が終わった後いつもどおりにはやての家に行こうとしていたのだけど……

【真夜さんちょっと相談があるんだけどいいかな】

何だユーノか……んで相談って何だ

【とりあえず公園にきて下さい。】

何で公園なんだ別にこのまま念話でも良いんだけど……

【ま、良いんじゃないですかどうせ暇ですしね】

はあ………わかったよ行けば良いんだろ行けば

【ありがとうございますでは公園で待ってます】

こうしてユーノの相談を聞くために公園に行く事になった。

公園

「ユーノどこだ」

【あ、真夜さんこっちです。】

何でベンチに座ってるんだと言いたいがそんなに気にしなくても良
いか

『そこは、ツッコまないでツッコミ賞取れませんよ』

「いや要らないからしかもしかましゃべるなよ誰かに気付かれたらどうす
んだよ」

『すみませんついいいじりたくなって。』

「あーわかったよ」

早々に話しをきりあげユーノに問い掛けた

「それでユーノ相談ってなんだ」

【いきなり過ぎて戸惑うけど実は……なのは達の戦いを見てくれな
いか】

「……ちよつと待て何で見なきゃ行けないだ」

『主、少し訳を聞いてみましょう』

【簡単に言えば立ち合い人みたいな感じだね】

「ま、それなら納得だなそれにあの二人の戦いかたもみたいしな」

【でもなのはは、遠距離戦を得意にしているから意味が無いと思う

よ】

「…………じゃあ俺は、これで」

『主、良いんじゃないですかどうせ暇ですから行くだけ無駄じゃないですよ』

「仕方ないなそれでいつやるんだ？」

【…………それが僕にも分からなくて…】

ユーノは、さっきの一言で真夜とエクシア怒りに触れてしまいなんとか説得をして沈めた

【勘では今日の夕方に始まると思います】

「なるほどだったらけっかいが出たら行けば良いんだな」

【うんとりあえず僕は、なのはとこころに戻るね】

「じゃあ俺達は、家に戻るか」

こうして立ち合いを約束した俺だけど飽くまでも見るだけだから陰で見守る事にした

「それで俺は、どうすれば良いんだ？」

『主、どうせなら家に帰ったらどうですか』

家が、そういえば最近帰ってなかったな…たまには、帰った方が良いな

「じゃあ俺の家に一旦帰ってみるか」

『主の家がいつの間にか幽霊がいたりして…』

「不吉な事をゆうなよ…ま、特に怖くは無いな」

俺は、自分の家に向かった。でも久々に帰るからゴミとかが落ちてる場合もありえるま、その時は、掃除すれば良いと思っていただけが

……

自分の家

『……主これって…』

「ああ………」

二人が見た先にはゴミがいっぱいあってさらに虫とかがわんさかいました。なんかもう幽霊が出てもおかしくないなと思う真夜とエクスアだった

「……ととりあえず掃除するぞ!」

『あ、主けっかいが発生しました。』

「……なに!」

なんか来た意味が無いじゃないか!!!と心の中で叫んだ……そして真夜達は渋々けっかいが発生したところに向かって行く……

海鳴り公園

「ここら辺で見てるか」

今俺は、おそらく最終決戦を見ようとしている……二人の少女が海の上で睨み合っている……その近くにユーノがそれをみてる。

【主、この場所は、何か危なくないですか？】

仕方ないだろ他場所だと見つかりやすいし遠いと見えないからここがベスト何だよ。

【いいですけど……そろそろ始まりますよ】

二人は、周りに魔法の弾を集めて撃ち始めた……二人が撃った魔法の弾はことごとくぶつかっていて全くひかず相手の弾を落としている……それは、真夜にとって珍しい光景だった。それを見ていた時に一つ海に落ちた。まさかと思った時に水しぶきが自分に襲い掛かって来た……

っておいしい水がああ……

【だ、大丈夫ですか主】

真夜は、おもいつきりずぶ濡れになっていた

これ着替えないと風邪引くは、でももう少し見たいな……

【大丈夫です。主は、馬鹿だから風邪は、ひきませんよ。】

軽くスルーする真夜：話しは変わって二人の戦いは、まだ続いていた。

二人は、魔法の弾を撃ちおわらせぶつかり合おうとしたその瞬間！！

「待つんだ二人共」

二人を止めた奴は、黒い服に杖を持っているまるで死神？

【主、これはやばそうですね】

？なにが言いたいんだ

【あれは、多分管理局って存在だと思います見つかったらまた面倒だからずらかりますよ】

り、了解した！！

俺達は、気付かれずにそつとけっかいから逃げ出した。その後はやての家に行って服を着替えた。だが……

「真夜くんな・ん・で濡れてたんや」

「えっと……あ、足が滑って川に落ちた……」

「……そうゆう事にしとくよ」

何とか話しをごまかした？今日は、なんだかんだで疲れた：明日は、はやては、病院だから学校に行った後に迎えに行ってみるかと思っただがそうは、いかなかった。

明日の朝（はやての家）

「……風邪やな」

『風邪ですね』

朝起きたらなんか風邪をひいていたらしいはあ流石にあれだけずぶ濡れになれば風邪は、引くのかよ

『まさか主が風邪を引くなんて世界って謎が多いですね』

「おい喧嘩売ってんのかエクシア……うっ」

「はいはい真夜くん余り動かない」

『これだと一緒に病院に行けませんね』

エクシアの一言で真夜が覚醒する

「だ、大丈夫だこれぐらいの風邪は……」

そして倒れた……目覚めた時はやてが目の前で看病してくれていた。はやては、俺を連れて病院に向かったどうやら俺がうるさかったらしい。

病院

「はい、二人共良いですよ……」

「よかったなあ真夜くん風邪が少し直って」

「ああ、まだ少しくらくらするけどな」

とりあえず連れてつてもらった所がはやてを見ている先生に見てもらって薬を渡されてそれを飲んだら結構直って用事も済んだし帰ろうとしたが…

「確か真夜くんだけちょっと良いかな？」

「俺ですか」

「真夜くん先に行くで？」

「あ、はやてちょっと先に行ってくれ、それとこれも頼む」

と言いつつエクシアを投げる…はやては、びっくりしつつキャッチした。

エクシアがすつごく怒っていたが無視って事で、はやては先に行つて待ってるらしい…

「それで先生何ですか急に呼び止めて？」

「……真夜さんってははやてちゃんの病気って分かりますか…」

「いや俺、小学生だからわかりませんよ…」

平凡的な反応する真夜だけど実際まだ子供には分かりにくい質問かと…

「まあ、そうよね…はつきり言いますけど…あの子もう危ないのよ」

「俺、そんなに危ないんですか……」

「無理にポケなくて良いから」「ごめんなさい」「全く」

「それってどうゆう事ですか!！」

急に話しを変える真夜流石にいらぬポケをしてしまった。

「はやてちゃんは、重い病気でもう私達は、手に負えないのしかも今は足だけどいずれば、肝臓やいろんな所が危なくなるのよ」

「……………で、それだけですか」

「え!?!」

びつくりする先生それはそうだはやてが危なくなってる筈なのに真夜は、全く顔を変えてなかった

「それじゃはやてが待ってるので」

「あ!?!まっ」

そのままドアを閉める先生がそのドアを開けた途端そこには誰も居なかった

「はやて遅れてごめんちょっと話しに時間かけすぎて」

「うちは、大丈夫やでエクシアと話していたからなあ」

【主後で覚えて下さいね】

「と、とりあえずはやてちよつと公園行かないか…」

「別にええよでもどうしてや」「気分転換だよ」「分かった」

そのままはやてと一緒に公園に行ったけど真夜は、やっぱり困っていたはやてがもしかしたら死んでしまうそれを思うと意識が薄れてしまつてそんな事考えてる暇は無い

海鳴り公園

「海は、何でこんなに広いんだろう」

『なにいきなり着いた途端に変な事を言ってるんですか？』

「真夜くん何か飲みたいもんある？」

「いやはやて俺が……」

「真夜くんたまにはうちにも手伝いさせてえな」

と言つてはやては自動販売機に向かって行く…

【主何か悩んでいますね】

エクシア……それが…はやてが死ぬかも知れないって言われたんだ。

だからそう考えると……

【主、大丈夫ですよいつかは助けられる方法がありますよ……だけどそれを一番知ってるのは、主ですから安心してくださいな。でそれはそうとしてはやてさんが絡まれていますよ】

言った瞬間真夜は、そこに居る腹黒い六年生に向かって蹴りをかまして喧嘩を売った……だけど六年生が泣いて帰っているどうやら真夜が激強だから瞬殺で倒していた

「全くはやてに手を出すなんて百年早いわ」

「……あ、ありがとうなあ真夜くんはいこれ……」

はやてから渡されたのは……あずき要りのジュース……

「……はやてやっぱり俺あっちの販売機に行ってくる」

「え！？真夜くん何で？」

【主何で飲まないですか？】

「あんなの飲めるかあ！！ってあれここは、どこだ……」

『どうやらけっかいですな反応していましたが無視していました』

「あれこのパターンっていつものあれか……」

いつの間にか、けっかい内にいる俺達このパターンは、と考える暇はなかった……

「…………ブレイカ…………」

遠いところから聞こえる…そして声が聞こえた方を向くと大きい水柱が立っていて津波みたいにこちら迫っていた

「…………ふ、不幸だあああ!!?!?!?!?」

『またこんな結果になってしまっんですか』

そして終わった時には、けっかいから出て来ていた…そしてはやてがきた…

「真夜くんどうしたのそんなずぶ濡れになって…」

「いやちょっと九死に一生だな」

【オチ担当ですね】

「誰に言っただエクシア？」

【内緒です。主にもいつか分かりますから】

こうしてまた明日になったら風邪を引いていた

「…………風邪だなあ」

『…………風邪ですね』

「結局こうなるのかよ」

『例えが間違えてるんですか。』

「そつやなあ本当に間違えてるかもなあ」

「お前ら俺を馬鹿にしているのか」

「『うん』」

「……もう勝手にしやがれ」

結局こんな事になるなんて…ま、平和だな

第7話（後書き）

エ「やっと無印編終わりました」

は「これでついにうちの出番やなあ」

ユ「いやまだ空白期があるらしいよ」

作「それをやらないとA S編は、始まらないからな」

エ「はい今回は、解説を入れてみましょう」

作「エクシアのけっかい入る時は、大胆忍びと同じく静かに入るから余り気ずかれないし勝手にけっかいの中に入るからたまに迷惑だな」

は「そうゆえば真夜くんは？」

エ「風邪引いて家で休んでいます」

ユ「それじゃあ次回予告!!」

は「何の訳かユーノとバトル!!」

エ「そしてはやてと買物!!」

ユ「空白でやる意味無くない」

作「気にするな俺は、一回ぐらいオリジナルをやってみたいからだ」

真「ごほ、てめえら早く終わらせねえのか…」

エ「はい、では」

全員「また次回！！」

真「何でまた才子担当になってんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4092r/>

魔法少女リリカルなのは 闇を掃う者

2011年10月27日17時15分発行